

平成29年度第5回小学校ゼミナール記録

2017年12月23日(土)

於：広島大学

司会者・発表者：西宗一郎（広島大学教育学研究科院生）、八島恵美・新田智子（広島大学附属小学校教諭）

参加者：影山和也（広島大学准教授）、八島恵美（広島大学附属小学校教諭）他11名

1. 協議内容

2月に予定されている「初等教育全国協議会」における提案授業に関して、目標・題材・授業構想などに関して議論が行われた。授業者である八島先生と新田先生のそれぞれのグループに分かれ、各々で話し合いがされた。

2. 授業構想の検討

八島先生のグループでは、「お店の新メニューを考えよう」という題材を扱う授業について話し合いが行われた。データの整理の際に2つの観点を決めるということに重点をおき、表やグラフを使って特徴や傾向を読み取ることを通して、人気を望めるメニューを考察させる、という授業構成であった。主に児童に提示する架空のレシートの工夫と観点を2つに定めるための教師の手立てについて議論を行った。まず、実際のデータではなく架空のデータをなぜ扱うのかについて議論された。実際のデータを扱う場合着目する観点多いことや、学習させたいところからずれる可能性があるため架空のデータを用いることで意見がまとまった。その上で、できるだけより現実に近くするために一度に購入した個数やメニュー名を工夫するなどの協議が行われた。次に、「味」「種類」という2つの観点到決めさせる教師の手立てに関して議論した。計画の段階では「いちご大福」ひとまとまりで見る児童に対して「いちご」と「大福」で分けて調べさせるにはどうすればよいか、また、新メニューを考案するために今までのメニューから考えさせるように児童を誘導するにはどうすればよいかが議論された。児童の自由度を失わぬよう発問や提示するメニューを考え直した。

新田先生のグループでは、「体の部分の長さ同士の関係を探ろう」という題材を扱う授業について話し合いが行われた。体の一部の長さ同士の関係を生徒が予想した上で、それが成り立つかどうかの判断方法を話し合わせることを授業のメインとして考えられていた。話し合いの最初は、統計的活動の計画の段階で、どこまでのことをきまりとして共有しておくべきかについて協議がされた。協議の途中で、「今回の授業は理科の授業で行われている仮説検証ではないか」という意見が出され、統計的活動と仮説検証の違いに関して議論が深まった。仮説検証では、当初の問題の段階で結論のパターンが決まってしまうのに対して、統計的活動では、問題に対してデータを解釈することで結論を得る点が相違として挙げられ、統計的活動においてはデータとデータの関係性を大事にし、データから仮説を創ることを重視するべきであるということが共有された。また、統計は実用学であるため、活動を通して実生活に還元される何かを得られることが理想であり、そのためには最初の問題化の場面を工夫する必要があるという意見も出た。

(文責：合田泰智・水元千秋)